

第6章 平成9年度山口大学構内の試掘調査

第1節 吉田構内の試掘調査

1 農学部附属農場堆肥舎新営に伴う試掘調査

(1) 調査の経過

吉田構内の東部、牛舎西隣の放牧地に堆肥舎の新営が計画された。これまで、農学部附属農場では良質な堆肥を作るため、果樹の剪定枝、土手の草、畜産から出る厩肥や家畜の尿等を混合堆積していたが、堆肥舎がなく野積みしているため、肥料成分が大部分流失し、施用効果が著しく低下していた。加えて、平成7年8月30日に山口保健所環境指導課の視察があった際に、現状では廃棄物の処理及び清掃に関する法律等に抵触するとの指導があったためである。

調査区は、吉田地区への統合移転の際、第IV地区と呼ばれていた地区に相当する。調査区から南へ約50mの地点に位置する牛舎敷地では、小野忠熙氏らにより発掘調査が行われた。調査の結果、弥生時代の溝や土坑、古墳時代の竪穴住居などが検出され、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器などが出土したとされている¹⁾。また、平成8年度に行った農学部附属農場排水管布設に伴う試掘調査では、古墳時代後期から中世にかけての包含層、ピット群を検出した²⁾。しかし、平成7年度に調査地に隣接する牛舎の敷地で試掘調査が行われた際は顕著な遺構・遺物が認められなかった。ただし、調査区周辺における埋蔵文化財の遺存状況を把握するには、依然としてデータが不足している。以上の状況を踏まえ、埋蔵文化財資料館運営委員会は協議の結果、試掘調査が必要であると判断した。これを受け、埋蔵文化財資料館は平成9年11月4日から11月12日にかけて発掘調査を実施した。

調査区の設定にあたっては、予定地のうち、平成7年度に試掘調査を行った牛舎敷地に近い東側は遺構が希薄である可能性が



Fig.55 調査区位置図

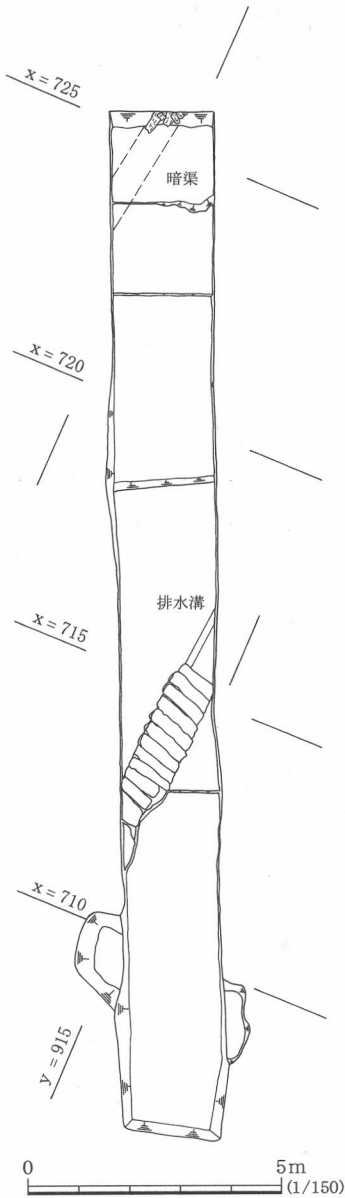


Fig.56 調査区設定位置図

高いため、予定地の西縁に沿って、幅約2m、長さ約20mの範囲で設定した。調査面積は約41.5㎡である。

(2) 基本層序 (Fig.57, PL.26 (3) (4))

本調査区における基本層序は、次の順である。第Ⅰ層：茶褐色粘質土（表土）、第Ⅱ層：灰褐色土、暗オリーブ色土を主とする造成土、第Ⅲ層：灰オリーブ色粘質土（水田耕土）、第Ⅳ層：灰オリーブ色粘質土・オリーブ灰色シルトを主とする水田床土、第Ⅴ層：茶褐色土（盛土）、第Ⅵ層：明緑灰色シルトを主とする地山

調査地は直前まで放牧地として使用されるとともに、堆肥も近くに野積みされていたことから、第Ⅰ層が約40～80cmと厚く、極めて脆弱であった。また、第Ⅱ層も脆弱であったため、調査区南部では壁面が一部崩落し、調査に支障をきたした。

x=718m付近から以北では、第Ⅰ層の下に、第Ⅱ層が約40～70cm、2層に渡ってみられる。第Ⅱ層の下で水田層である第Ⅲ層、第Ⅳ層を検出した。第Ⅲ層は厚さが約20cm～30cmである。第Ⅳ層は厚さが約10～80cmで、暗渠埋設部分で厚くなる。このうち、部分的にみられる第Ⅳ-5層：黒褐色シルトは第Ⅲ層以前の耕土である可能性がある。第Ⅳ層の直下は第Ⅵ層となる。検出標高は約30.6mである。北西壁土層断面から、水田は第Ⅵ層を掘りこんでおり、水田造成時に大規模な削平があったことをうかがわせる。

0 5m (1/150)

x=718m付近から南では第Ⅲ層、Ⅳ層が認められず、第Ⅱ層の直下が第Ⅴ層の茶褐色土となる。この層は水田床土の可能性もあるが、x=718m付近から北と土色が異なること、

通常の床土とは異なり、非常に固くしまりがあることから、統合移転前の盛土として捉えた。上面が路面などの生活面であった可能性が考えられる。なお、統合移転時の牛舎敷地の調査では、移転直前まで民家が建っていたとされている³⁾。今回、附属農場関係者からも調査地近辺に民家が建っていたとの教示を受けた。第Ⅴ層の直下は第Ⅵ層となる。検出標

吉田構内の試掘調査

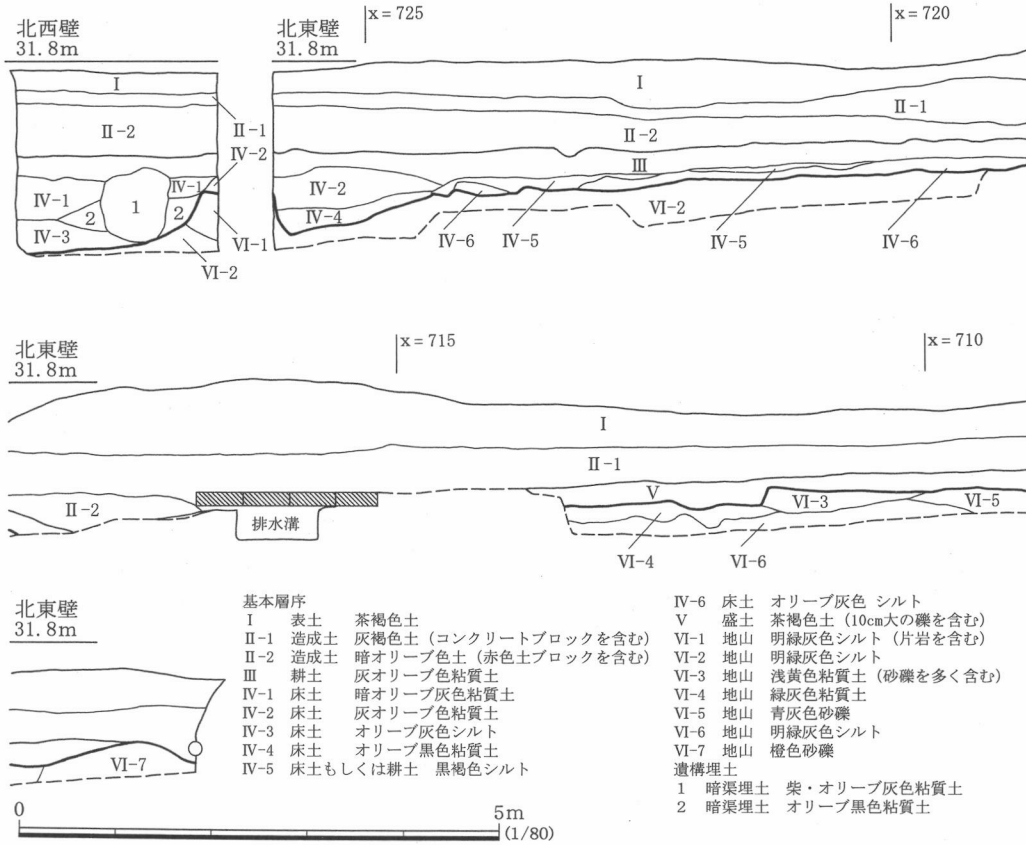


Fig.57 調査区土層断面図

高は約30.5~30.7mである。 x = 718m付近から北では第VI-2層：明緑灰色シルトのみが認められたのに対して、第VI-6層：明緑灰色シルトの上に第VI-3層：浅黄色粘質土、第VI-4層：緑灰色粘質土、第VI-5層：青灰色砂礫が堆積しており、安定していない。これらは河川堆積によるものと考えられる。第VI-2層と第VI-6層は同一層の可能性が高く、 x = 718m付近から北では、第VI-2層より上層は水田造成時に削平されたのであろう。

(3) 遺構・遺物 (Fig.56, PL.26 (2))

調査区北部で統合移転前の水田暗渠を検出した。北-南に流水方向を持つ。導水のため、柴を敷き詰めている。この他には、顕著な遺構は検出できなかった。水田造成時に大規模な削平が行われたためと考えられる。遺物は第IV-5層から時期不明の土器片が2点出土したのみである。

(4) 小結

今回の試掘調査の結果、検出したのは統合移転前の水田関連の土層と暗渠、盛土であり、それ以外に顕著な遺構と遺物はみられなかった。しかし、不明な点が多い調査区近辺のデータが得られたことは大きな成果であったといえる。

調査区における統合移転時の造成は基本的には埋め立てによるものと考えられる。一方、水田は地山を削って造成されており、調査区に隣接する牛舎敷地でも同じ状況を示している。また、統合移転時の試掘調査の際にも、遺構については「水田化の際に切り下げられて損壊が大きい」と報告されており³⁾、水田造成時の削平が大規模であったことがうかがえる。

しかし、調査区近辺は未調査部分が多く、地下の状況に不明な点が多いため、埋蔵文化財の遺存は否定できない。地点によって、地下の状況が異なることが十分に予想される。前述のように統合移転時の試掘調査と平成8年度に行った農学部附属農場排水管布設に伴う試掘調査の結果から、調査区近辺には弥生時代～中世の集落跡の存在が推測される。また調査区の北側の丘陵についても埋蔵文化財の存在が予想されるが、調査例がなく詳細は不明である。今後の継続的な調査によってさらにデータを蓄積する必要がある。(田畑)

[注]

1) 山口大学吉田遺跡調査団『山口大学構内吉田遺跡発掘調査概報』(山口大学、1976年)

2) 第3章-3参照

3) 前掲注1)文献

2 農学部バイオ環境制御施設新営に伴う試掘調査

(1) 調査の経過

吉田構内の東部、農学部附属農場の実験水田に農学部バイオ環境制御施設の新営が計画された。予定地を含めた実験水田では、発掘調査は行われていないが、過去に遺物が採集されていることから¹⁾、埋蔵文化材の存在が十分に予想された。また、予定地に隣接する農学部農業観測所実験施設新営に伴う試掘調査では、7～8世紀代と推測される土坑、溝が検出されており、周辺一帯に古代の遺構が分布する可能性が指摘されている²⁾。埋蔵文化財資料館運営委員会はこれらの状況を踏まえて取り扱いを協議した結果、埋蔵文化財の遺存状況を確認するために試掘調査が必要であると判断した。

これを受けて、埋蔵文化財資料館では平成9年11月4日から12月12日まで試掘調査を行った。調査は、1号田のやや西寄りに、幅2m、長さ約70mで南北方向のトレンチを設定して行った。調査面積は約140㎡である。なお、予定地は当面調査後も現状通り水田として利用するため、確認した遺構の掘り込みは最小限にとどめた。

(2) 基本層序 (Fig.60・61, PL.28・29)

調査区における基本層序は次の順である。第Ⅰ層：灰色シルト（現水田床土）、第Ⅱ層：黄褐色土、黒褐色土を主とする造成土、第Ⅲ層：オリーブ灰色粘質土を主とする水田床土、第Ⅳ層：明緑灰色、緑灰色の砂礫、砂、シルト、粘土による地山

調査区は現在の水田床土である第Ⅰ層の直下に第Ⅱ層が客土されている。これは、統合移転時に既存の水田を区画整理した際の造成土である。第Ⅲ層は統合移転前の水田の床土である。第Ⅳ層は地山で、この上面が遺構と河川の検出面である。

調査区の北部、x=466m付近までは、第Ⅲ層はなく、第Ⅱ層の直下、標高約22.9mで第Ⅳ層を検出しており、統合移転時の削平が著しい。x=466mから南では、第Ⅱ層が最大で約40cmに及んでおり、その直下に第Ⅲ層が認められた。第Ⅳ層は標高約22.5～22.6mで検出した。第Ⅳ層は礫・砂・シルトが互層となって堆積しており、河川に



Fig.58 調査区位置図

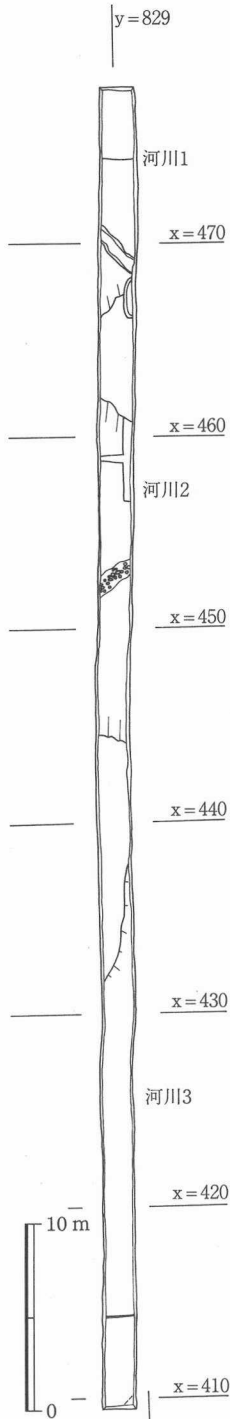


Fig.59 調査区設定位置図

よる堆積土と考えられる。

調査地の北側は北から伸びる丘陵の縁辺部に近い。また、統合移転前の水田の区画は、真北に対して約20°～30°西に傾いていることから、旧地形は北東側の標高が高く、南西方向に向かって傾斜していたと推測される。

(3) 遺構

河川3条と溝1条、土坑1基と近世・近代の水田に関連する暗渠、溝、ピット、土坑を検出した。

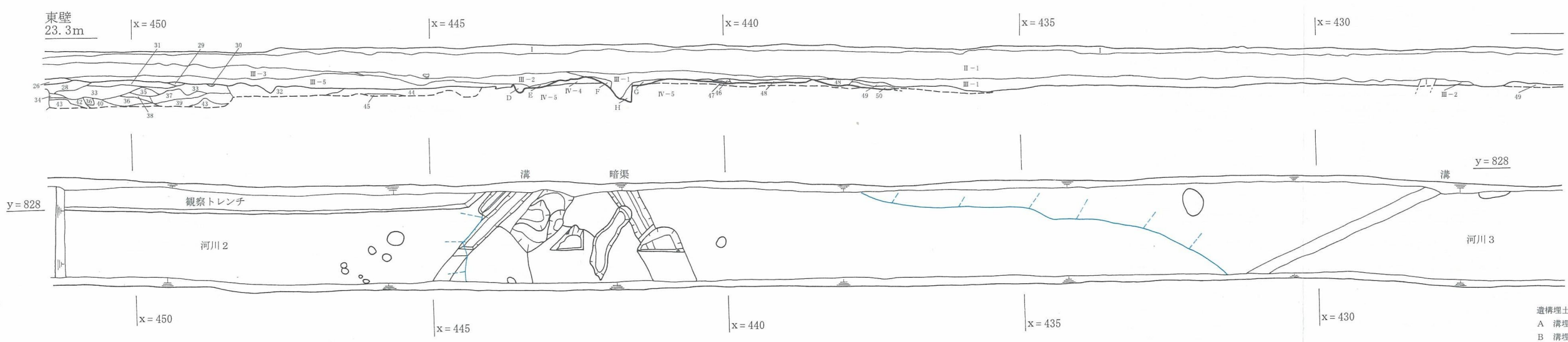
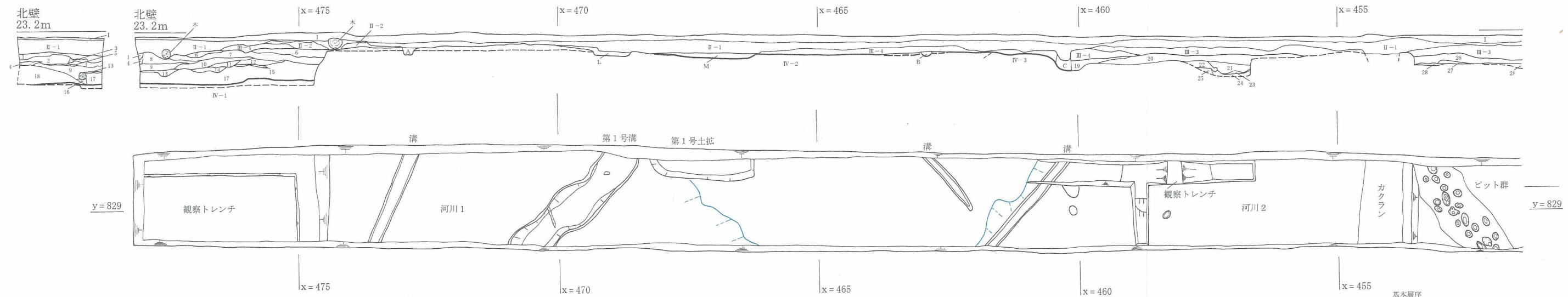
河川 (Fig.60・61, PL.28・29)

第IV層上面で3条の河川を検出した。北から河川1、河川2、河川3とする。

河川1はx=466m以北で検出した。北東-南西の流路方向を持つと考えられる。幅は10m以上である。北西肩は調査区外のため検出しておらず、南東肩は上面での確認にとどめている。標高はトレンチ北端で約22.8m、南東肩で約22.7mである。河底までの深さはトレンチ北端で約60cmである。埋土は上面がシルトで、以下は礫・砂・シルトの互層である。遺物は主に最上層の黒褐色シルト、黄灰色シルトから土師器、須恵器片、植物種子が出土した。出土遺物が少ないため、明確な時期については不明確である。しかし、7世紀後半の須恵器片が出土し、中世以降の遺物が出土していないことから、7世紀後半以降、中世以前に埋没したものと推測される。

河川2はx=444m～462mで検出した。東-西の流路方向を持つと考えられる。幅は約17mである。北肩、南肩とも上面での確認にとどめている。標高は北肩で約22.6m、南肩で約22.4mである。河底までの深さは確認していないが、最大で50cm以上である。埋土は上面が灰色砂礫、黒褐色細砂、黒褐色・黒灰色・黄灰色シルトで、以下は礫・砂・シルトの互層となる。遺物は小片で数が少ないが、主に上面から土師器、須恵器片、木片が出土している。中世以前の遺物が出土していないことから、河川1とはほぼ同時期と推測される。

河川3はx=438m以南で検出した。北東-南西の流路方向を持つ



- 基本層序
- I 現水田床土 浅黄色粘質土
 - II-1 造成土 黄褐色土
 - II-2 造成土 黒褐色土
 - III-1 水田床土 オリーブ灰色粘質土
 - III-2 水田床土 オリーブ灰色粘質土 (黄灰色、黒褐色シルトブロックを含む)
 - III-3 水田床土 オリーブ灰色粘質土 (黒褐色シルトブロックを含む)
 - III-4 水田床土 黄灰色粘質土
 - III-5 水田床土 黄褐色粘質土 (黒褐色シルトブロックを含む)
 - III-6 水田床土 灰オリーブ色粘質土 (黄褐色シルトブロックを含む)
 - III-7 水田床土 灰オリーブ色粘質土
 - III-8 水田床土 にぶい黄褐色粘質土
 - IV-1 地山 緑灰色砂礫
 - IV-2 地山 明緑灰色シルト
 - IV-3 地山 明緑灰色砂礫
 - IV-4 地山 明緑灰色粗砂
 - IV-5 地山 明緑灰色シルト
 - IV-6 地山 緑灰色細砂
 - IV-7 地山 緑灰色シルト
 - IV-8 地山 緑灰色粘土
 - IV-9 地山 緑灰色シルト
 - IV-10 地山 緑灰色細砂
 - IV-11 地山 緑灰色粗砂
 - IV-12 地山 緑灰色シルト
 - IV-13 地山 緑灰色砂礫

河川埋土	8 河川1堆積土	16 河川1堆積土	25 河川2堆積土	33 河川2堆積土	42 河川2堆積土	51 河川3堆積土
1 河川1堆積土	9 河川1堆積土	17 河川1堆積土	26 河川2堆積土	34 河川2堆積土	43 河川2堆積土	52 河川3堆積土
2 河川1堆積土	10 河川1堆積土	18 河川1堆積土	27 河川2堆積土	35 河川2堆積土	44 河川2堆積土	53 河川3堆積土
3 河川1堆積土	11 河川1堆積土	19 河川2堆積土	28 河川2堆積土	36 河川2堆積土	45 河川2堆積土	54 河川3堆積土
4 河川1堆積土	12 河川1堆積土	20 河川2堆積土	29 河川2堆積土	37 河川2堆積土	46 河川3堆積土	55 河川3堆積土
5 河川1堆積土	13 河川1堆積土	21 河川2堆積土	30 河川2堆積土	47 河川3堆積土	56 河川3堆積土	56 河川3堆積土
6 河川1堆積土	14 河川1堆積土	22 河川2堆積土	31 河川2堆積土	48 河川3堆積土	57 河川3堆積土	57 河川3堆積土
7 河川1堆積土	15 河川1堆積土	23 河川2堆積土	32 河川2堆積土	49 河川3堆積土	58 河川3堆積土	58 河川3堆積土
		24 河川2堆積土		50 河川3堆積土	59 河川3堆積土	59 河川3堆積土
				54 河川3堆積土	60 河川3堆積土	60 河川3堆積土

遺構埋土	H 溝埋土	明緑灰色シルトと灰黄色シルトのブロック土
A 溝埋土	I 溝埋土	オリーブ灰色シルトと灰色シルトのブロック土
B 溝埋土	J 溝埋土	オリーブ灰色シルト
C 溝埋土	K 溝埋土	緑灰色シルトと黒褐色シルトのブロック土
D 溝埋土	L 第1号溝埋土	黒褐色シルト
E 近世土坑埋土	M 第1号土坑埋土	黒褐色シルトと黒褐色シルトのブロック土
F 暗渠埋土		
G 暗渠埋土		



Fig.60 調査区遺構配置図・壁面土層断面図①

吉田構内の試掘調査

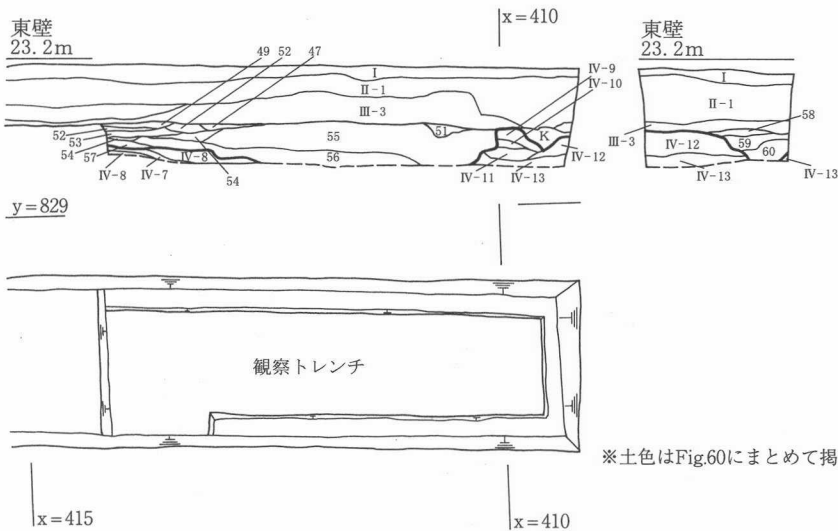
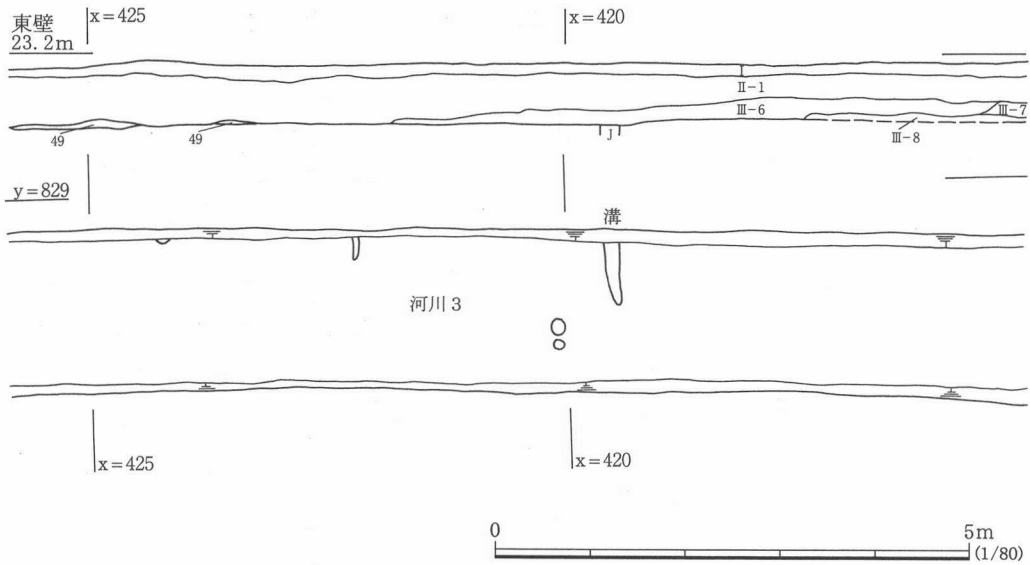


Fig.61 調査区遺構配置図・土層断面図②

と考えられる。幅は約28mである。北西肩は上面での確認にとどめたが、南西肩はトレンチ南端の観察トレンチで確認できた。標高は北肩、南肩、いずれも約22.5mである。河底までの深さは観察トレンチで、約30~40cmである。埋土は上面が灰色シルト・緑灰色砂礫で、以下はシルト・礫の互層である。遺物は上面の灰色シルトで、土師器、須恵器の小片若干が出土した。このため、明確な時期については不明であるが、中世以降の遺物が出土していないことから、河川1・2とほぼ同時期と推測される。

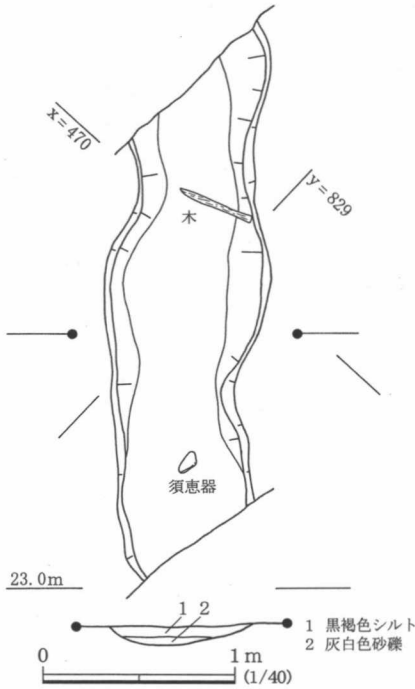


Fig.62 第1号溝平面図・断面図

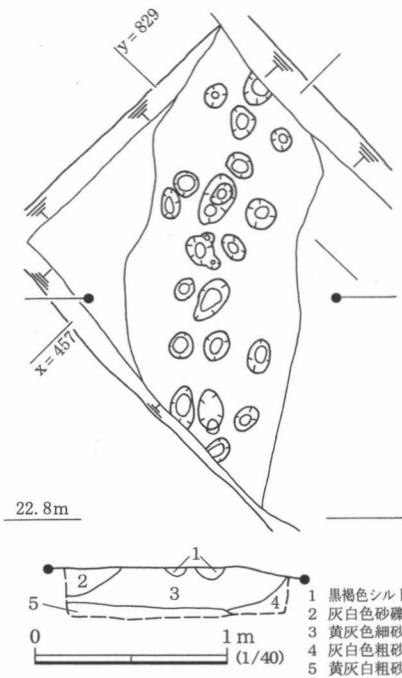


Fig.63 ピット群平面図・断面図

第1号溝 (Fig.62, PL.29 (3) (4))

x = 469~471m付近で検出された溝である。河川1の埋土を掘りこんでいる。長さ2.4m以上、幅が約90cmを測る。検出面での標高は22.9~22.8mである。深さは検出面から約10cmで、埋土は黒褐色シルト、灰白色砂礫層に分かれる。土師器、須恵器小片、木片が出土した。出土遺物は本来河川1に含まれていた可能性があり、遺構の時期を示すものとは断定できない。しかし、遺構の埋土の特徴から、河川1埋没以降の古代の溝と考えられる。

ピット群 (Fig.63, PL.30 (1) (2))

x = 452~454m付近で、河川2埋土の最上層、黒褐色シルトの直下にあたる黄灰色細砂の上面で検出された。この層は幅約90cm、長さ約2mに渡って検出された。ピット群の検出面での標高は約22.5mである。ピットの直径は約6~28cm、深さは約4~6cm、埋土はいずれも黒褐色シルトで、植物遺体を含むものもあった。これらは杭跡とするには深さが浅く、植物の根の痕跡などの可能性が考えられる。正確な評価を行うには、未調査部分を含めてさらに検討が必要である。

第1号土坑 (Fig.64, PL.30 (3))

x = 466~468m付近で検出された土坑である。大部分は東側の調査区外にあると考えられ、全形は不明である。検出面での標高は22.8mである。河川1の埋土を掘りこんでおり、深さは検出面から約10cmである。埋土は明緑灰色シルトと黒褐色シルトのブロック土である。遺物は出土していない。近世以降に下る可能性もある。

近世～近代の遺構

(Fig.60・61, PL.30 (4))

第IV層及び河川の上面から、統合移転前の水田に設けられていた暗渠と溝、それらに関連すると思われるピット、土坑が検出された。暗渠と溝は南東-北西方向のものとほぼこれに直交する北東-南西方向のものが主体であり、統合移転前の水田の区画の方向とほぼ一致している。

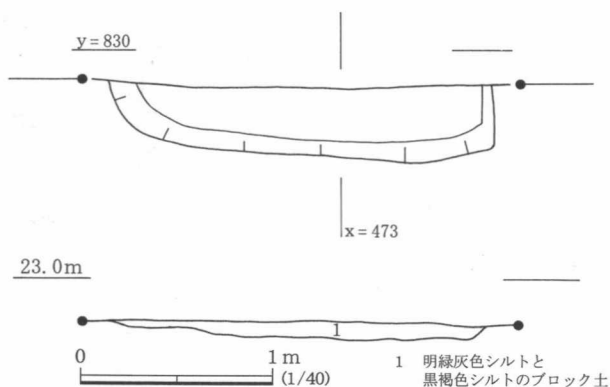


Fig.64 第1号土坑平面図・断面図

(4) 遺物 (Fig.65, PL.31～32)

河川1～3出土遺物 (Fig.65-1～16)

1～6は河川1出土遺物である。1は須恵器甕の胴部片である。外面は平行タタキ後、カキメを施す。内面には同心円のあて具痕を残す。土師質で焼成は不良である。2～5は須恵器坏身の口縁部である。5は外面に自然釉が付着する。いずれも立ち上がりは小さく、内外面回転ナデを施す。6は坏蓋の口縁部である。内外面回転ナデである。

7～15は河川2出土遺物である。7は土師器高坏の坏部である。風化が激しい。8は土師器高坏の裾部である。内外面にナデを施す。9・10は坏蓋の口縁部である。10は口縁部内面にかえりが付く。11は須恵器高坏の裾部、12～14は土師器甕の口縁部である。内外面にヨコナデを施す。15は須恵器坏身の口縁部である。内外面に回転ナデを施す。

16・17は河川3出土遺物である。16は須恵器坏身の口縁部である。直線的に外反し、内外面に回転ナデを施す。17は凹基式の石鏃である。右側基部が欠損している。石質は安山岩である。

第1号溝出土遺物 (Fig.65-18～20)

18は須恵器甕の胴部片である。外面は平行タタキの後、カキメ、内面には同心円のあて具痕を残す。19は須恵器皿の口縁部、20は須恵器高坏の口縁部で、いずれも内外面に回転ナデを施す。

遺構に伴わない遺物 (Fig.65-21～30)

清掃時出土遺物や第I層、II層、排土採集、暗渠出土遺物を一括する。詳細については

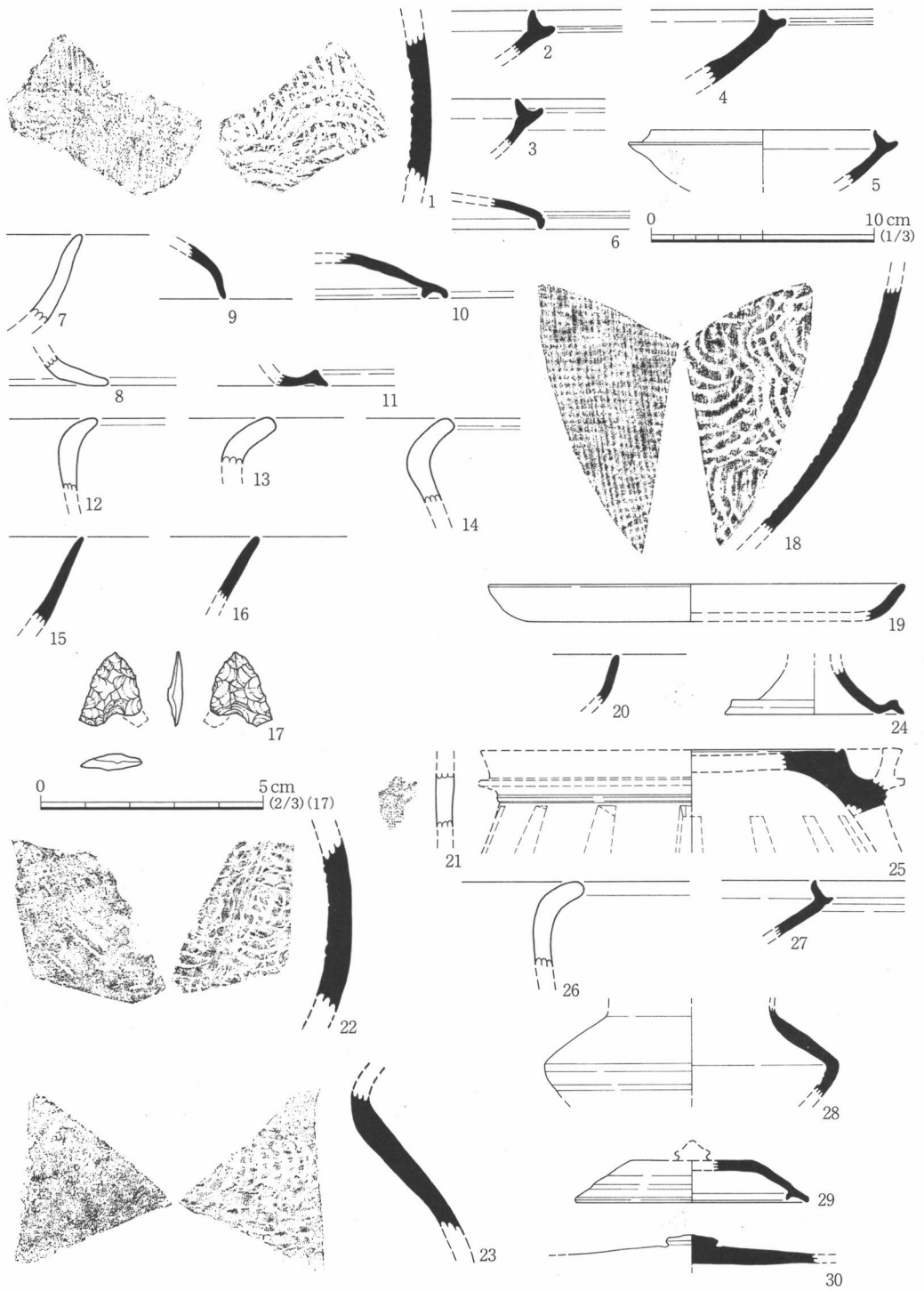


Fig.65 出土遺物実測図

観察表を参照されたい。清掃時、排土採集遺物についても、出土状況から本来大半が第Ⅰ層、もしくは第Ⅱ層に含まれていたと考えられる。

21は六連式製塩土器の胴部片である。外面はナデで内面に布目を残す。22・23は須恵器甕の胴部片である。22は外面が平行タタキ後、カキメ、内面には同心円のあて具痕を残す。土師質で焼成は不良。23は外面に自然釉が付着し、内面に同心円のあて具痕を残す。24は須恵器高坏の裾部である。裾端部はくぼみ、緩やかに広がる。25は須恵器円面硯である。海部に墨が付着し、陸部は研磨されている。脚部に縦方向の透かし穴を持つ。内面には自然釉が付着する。26は土師器甕の口縁部で、内外面にナデを施す。27は須恵器坏身の口縁部である。28は須恵器壺の胴部である。胴部中位で屈曲する。胴部下位に回転ヘラ削り後、ナデを施す。29・30は須恵器坏蓋である。29は天井部に回転ヘラ削りを施し、口縁部内面に小さなかえりが付く。30は天井部に扁平な摘みが付く。内外面に回転ナデを施す。

(5) 小結

今回の調査は吉田構内東部の実験水田における初めての発掘調査である。調査の結果、7世紀後半以降の古代の河川3条、溝1条、土坑1基を検出した。ただし、出土遺物が少なく、時期については今後の調査による検討が必要である。調査区は姫山から派生する丘陵と家畜病院から西に下降する段丘に挟まれた谷地形を呈している。今回検出した河川は、構内東部に源があり、標高の低い構内の中央部にかけて流れていたと考えられる。

出土した須恵器は坏身の立ち上がり、坏蓋の内面のかえりが小さいことを特徴とする防府市末田9号・10号窯出土土器³⁾と近似したものが目立った。調査区周辺に当該期の遺構が存在する可能性が考えられる。また、吉田遺跡において、円面硯は2点目、製塩土器は3点目の出土である。両者とも遺構に伴う出土ではないが、古代における官衙関連施設が調査区周辺にも存在していた可能性が高い。今後の調査が期待される。 (田畑)

[注]

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「農学部附属農場飼料園排水溝修復整備に伴う立会調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報V』、1987年)
- 2) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内農学部環境観測実験施設新営に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報X』、1992年)
- 3) 吉瀬勝康編『敷山・末田須恵器窯跡調査報告』(防府市教育委員会、2000年)

Tab.9 出土遺物観察表（土器）

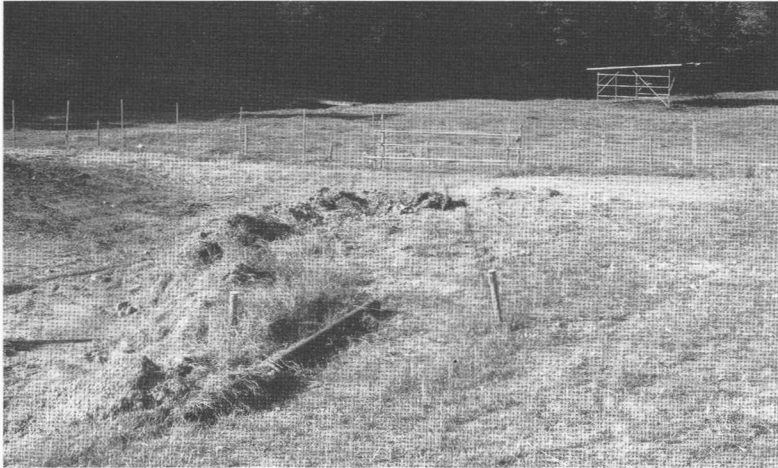
法量（ ）は復元値

遺物番号	出土遺構	層位	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調 ①外面②内面	胎土	備考
1	河川1	1層	須恵器 甕	胴部				①灰白色・黒褐色②灰白色	1～3mmの砂粒を含む	焼成不良
2	河川1	1層	須恵器 坏身	口縁部				灰白色	1～3mmの砂粒を含む	外面に自然釉付着
3	河川1 (暗渠埋土)	1層	須恵器 坏身	口縁部				灰白色	1～3mmの砂粒を含む	
4	河川1	1層	須恵器 坏身	口縁部 ～胴部				灰色	1mmの砂粒を含む	
5	河川1	1層	須恵器 坏身	口縁部 ～胴部	(10.1)			青灰色	微砂粒を含む	
6	河川1	1層	須恵器 坏蓋	口縁部				灰白色	精製粘土	
7	河川2	20層	土師器 高坏	口縁部				橙色	1～3mmの砂粒を含む	風化が激しい
8	河川2	28層	土師器 高坏	裾部				橙色	1～3mmの砂粒を含む	風化が激しい
9	河川2	20層	須恵器 坏蓋	口縁部				オリーブ灰色	精製粘土	
10	河川2	21層	須恵器 坏蓋	天井～ 口縁部				暗灰色	精製粘土	
11	河川2	20層	須恵器 高坏	裾部				明オリーブ灰色	精製粘土	
12	河川2	28層	土師器 甕	口縁部				暗灰黄色	1～3mmの砂粒を含む	
13	河川2	44層	土師器 甕	口縁部				灰褐色	1～3mmの砂粒を含む	
14	河川2	44層	土師器 甕	口縁部				黄灰色	1～3mmの砂粒を含む	
15	河川2	32層	須恵器 坏身	口縁部				灰色	1～3mmの砂粒を含む	
16	河川3	49層	須恵器 坏身	口縁部				灰色	1～3mmの砂粒を含む	
18	第1号溝	1層	須恵器 甕	胴部				①灰色 ②明 オリーブ灰色	1mmの砂粒を含む	
19	第1号溝	1層	須恵器 皿	口縁部 ～胴部	(19.2)	(1.7)		灰白色	1～5mmの砂粒を含む	
20	第1号溝	1層	須恵器 高坏	口縁部				灰白色	1～3mmの砂粒を含む	他器種の可能性あり
21		清掃時	六連式製塩土器	胴部				①褐灰色 ②にぶい橙色	1～2mmの砂粒を含む	
22		清掃時	須恵器 甕	胴部				①灰白色・黒褐色②灰白色	1～3mmの砂粒を含む	焼成不良
23		第1層	須恵器 甕	胴部				灰色	1～3mmの砂粒を含む	外面に自然釉付着
24	暗渠 (x=440～445)		須恵器 高坏	裾部				明青灰色	1～3mmの砂粒を含む	
25		第II層 (x=440～445)	須恵器 円面碗	陸部～ 海部				灰白色	精製粘土	海部に墨が付着
26	表採		土師器 甕	口縁部				①橙色 ②にぶい黄橙色	1～3mmの砂粒を含む	
27	表採		須恵器 坏身	口縁部				青灰色	1mmの砂粒を微量に含む	
28	表採		須恵器 壺	胴部				灰色	1～3mmの砂粒を含む	
29	表採		須恵器 坏蓋	天井～ 口縁部				①灰白色 ②灰色	1mmの砂粒を含む	
30	表採		須恵器 坏蓋	天井部				灰色	1～5mmの砂粒を含む	

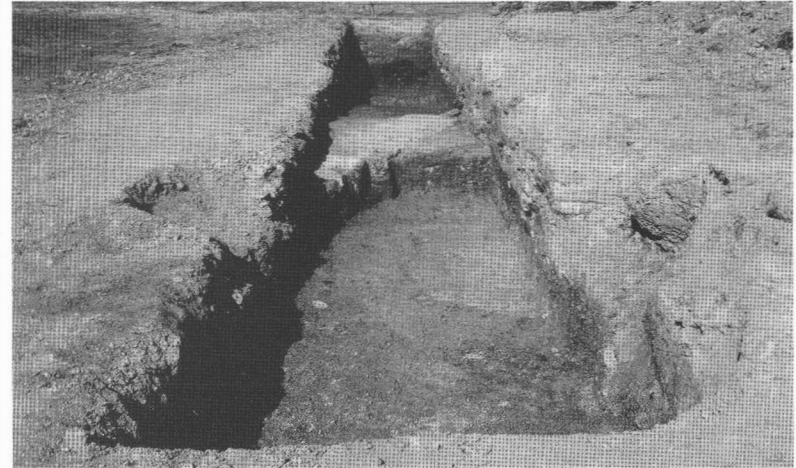
Tab.10 出土遺物観察表（石器）

法量（ ）は現存値

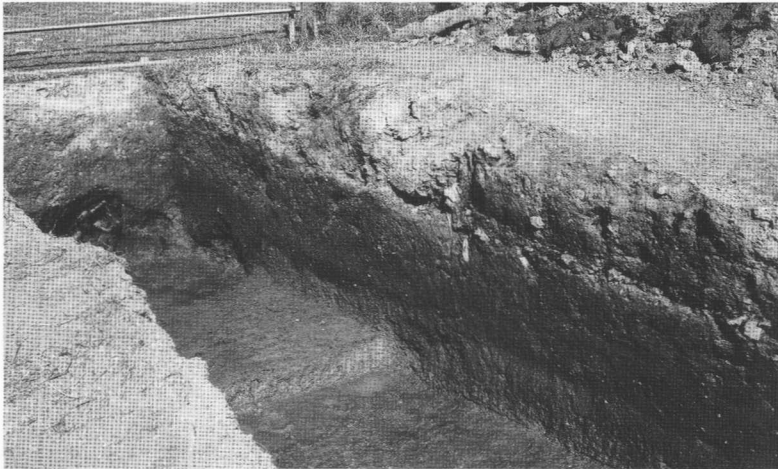
遺物番号	出土遺構	層位	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石質	備考
17	河川3	49層	石鏃	1.7	(1.4)	0.35	0.53	安山岩	



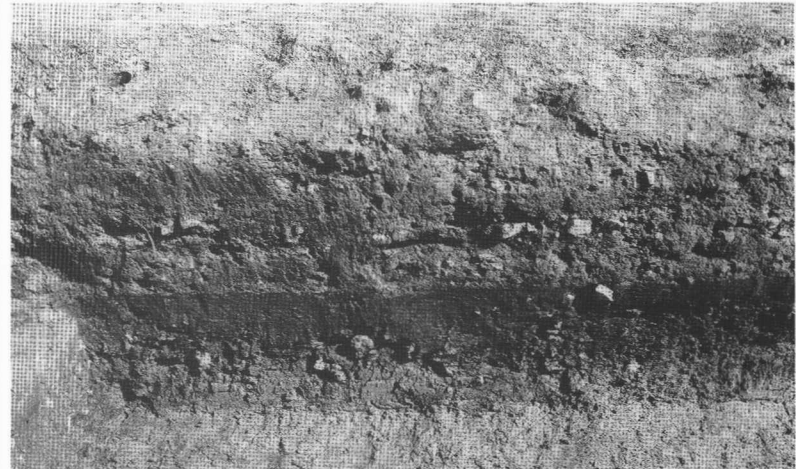
(1) 調査前全景 (南から)



(2) 調査区全景 (南から)



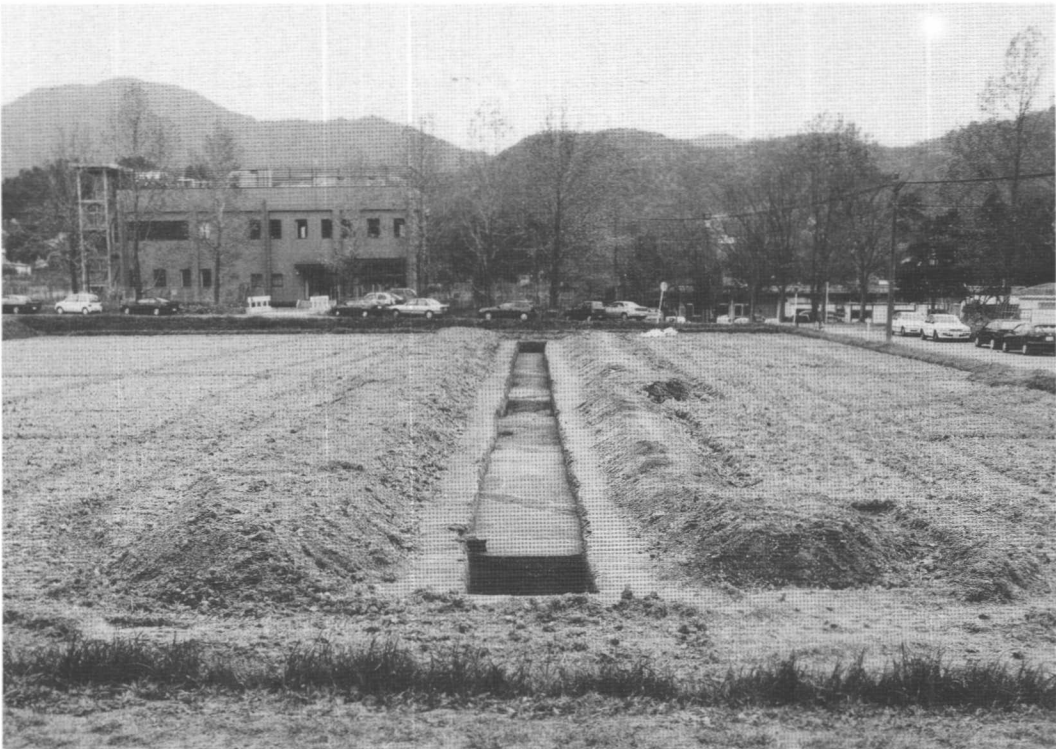
(3) 調査区北部東壁土層断面 (南西から)



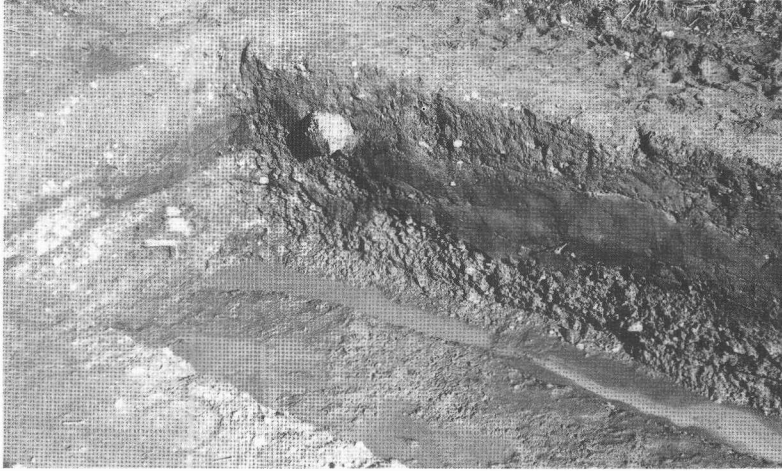
(4) 調査区南部東壁土層断面 (西から)



(1) 調査前全景 (北から)



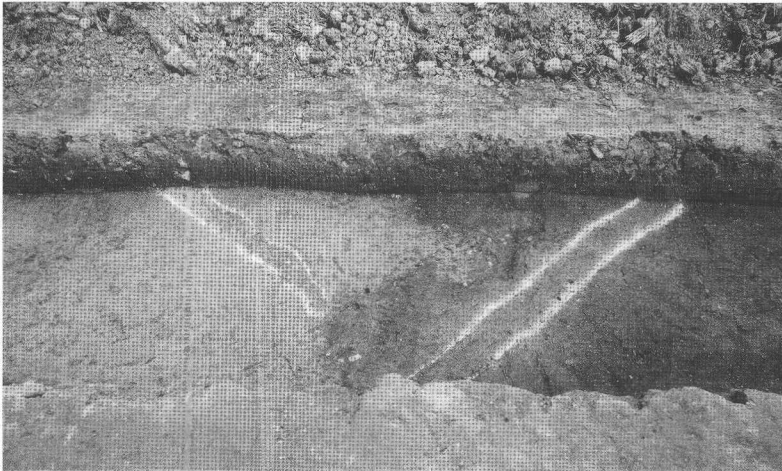
(2) 調査区全景 (北から)



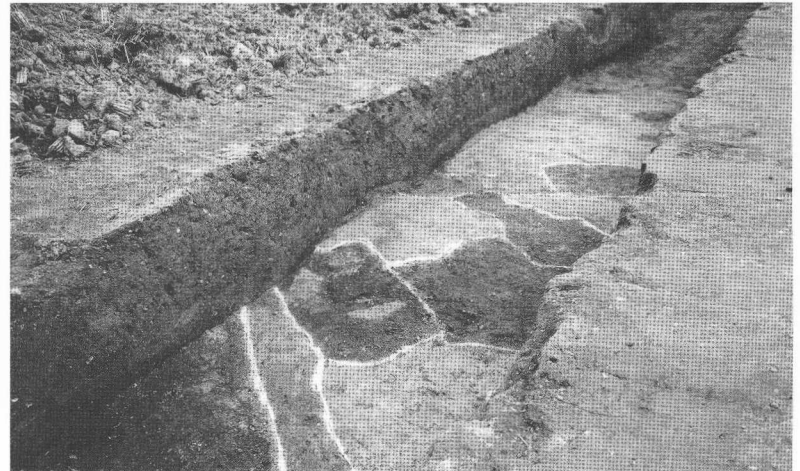
(1) 河川1 東壁土層断面 (調査区北端・南西から)



(2) 河川1 検出状況 (北西から)



(3) 河川2 北肩検出状況 (西から)



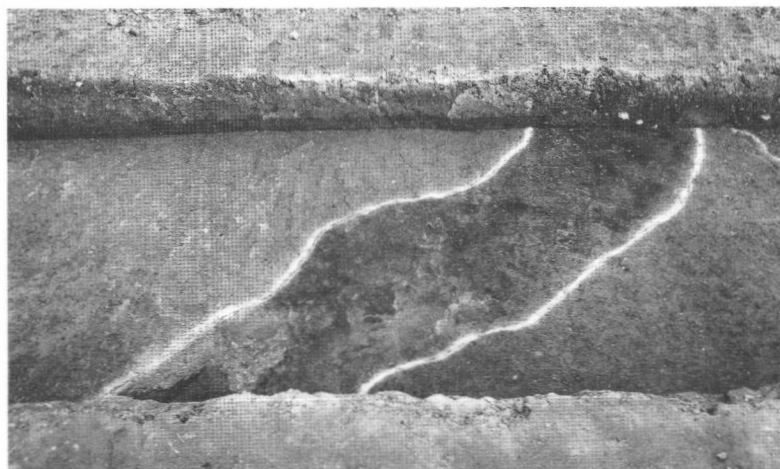
(4) 河川2 南肩検出状況 (北西から)



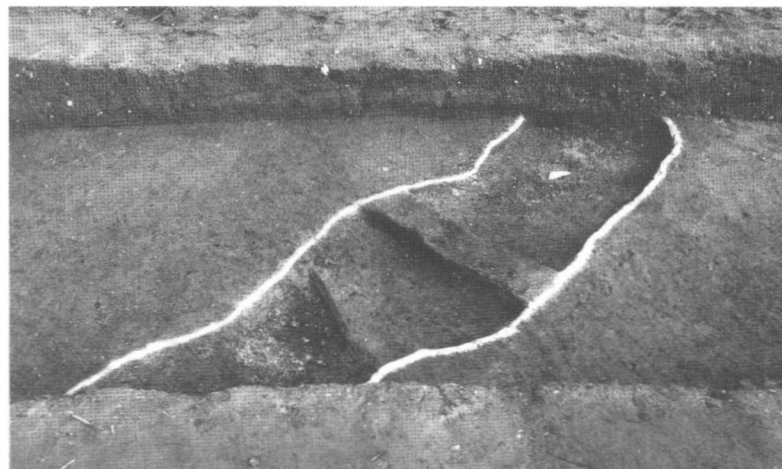
(1) 河川1～河川3北肩検出状況(南西から)



(2) 河川3東壁・南壁土層断面(調査区南端・北西から)

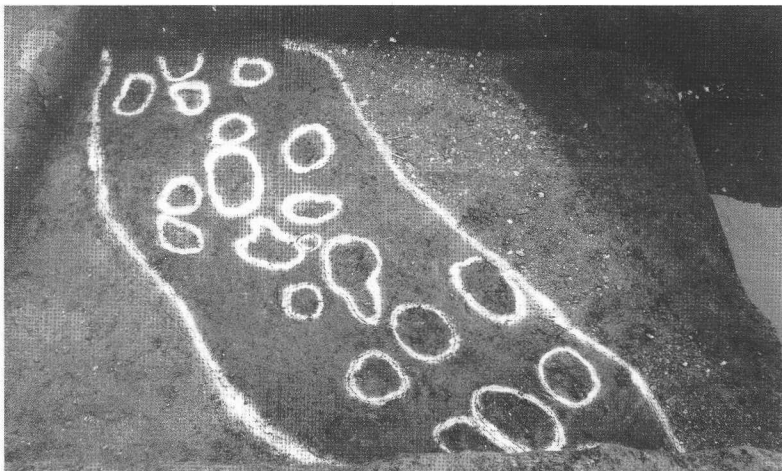


(3) 第1号溝検出状況(西から)

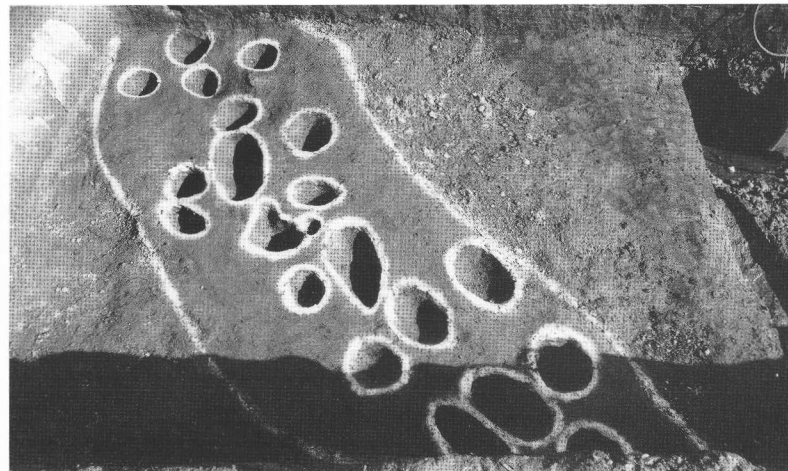


(4) 第1号溝遺物出土状況(西から)

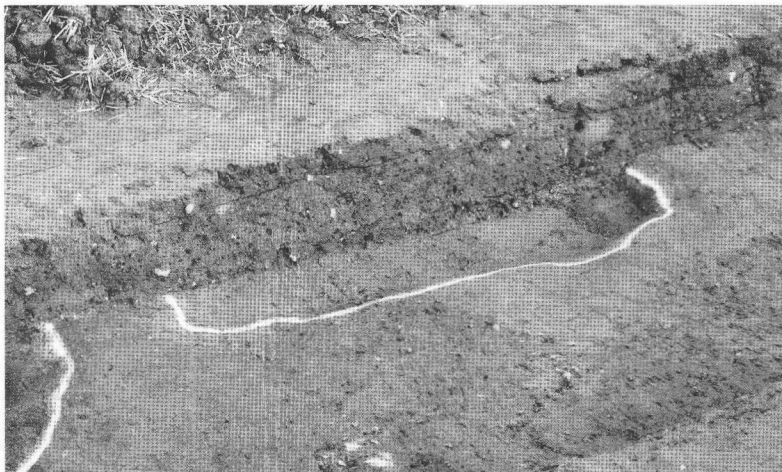
古田構内農学部八才環境制御施設新宮に伴う試掘調査 三



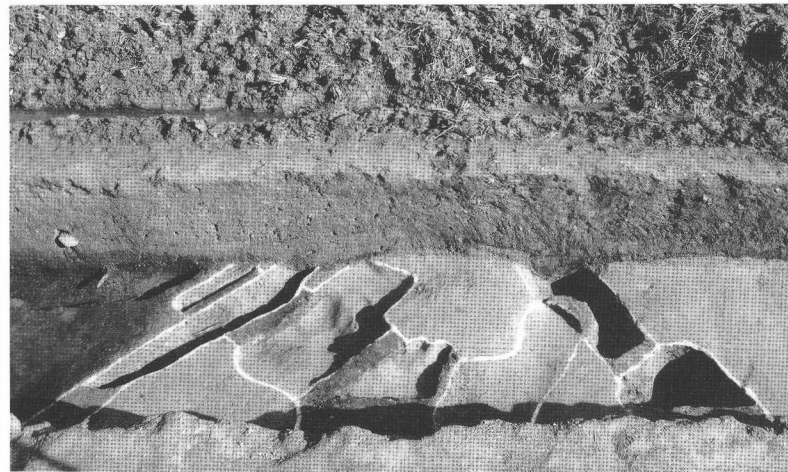
(1) ピット群検出状況 (西から)



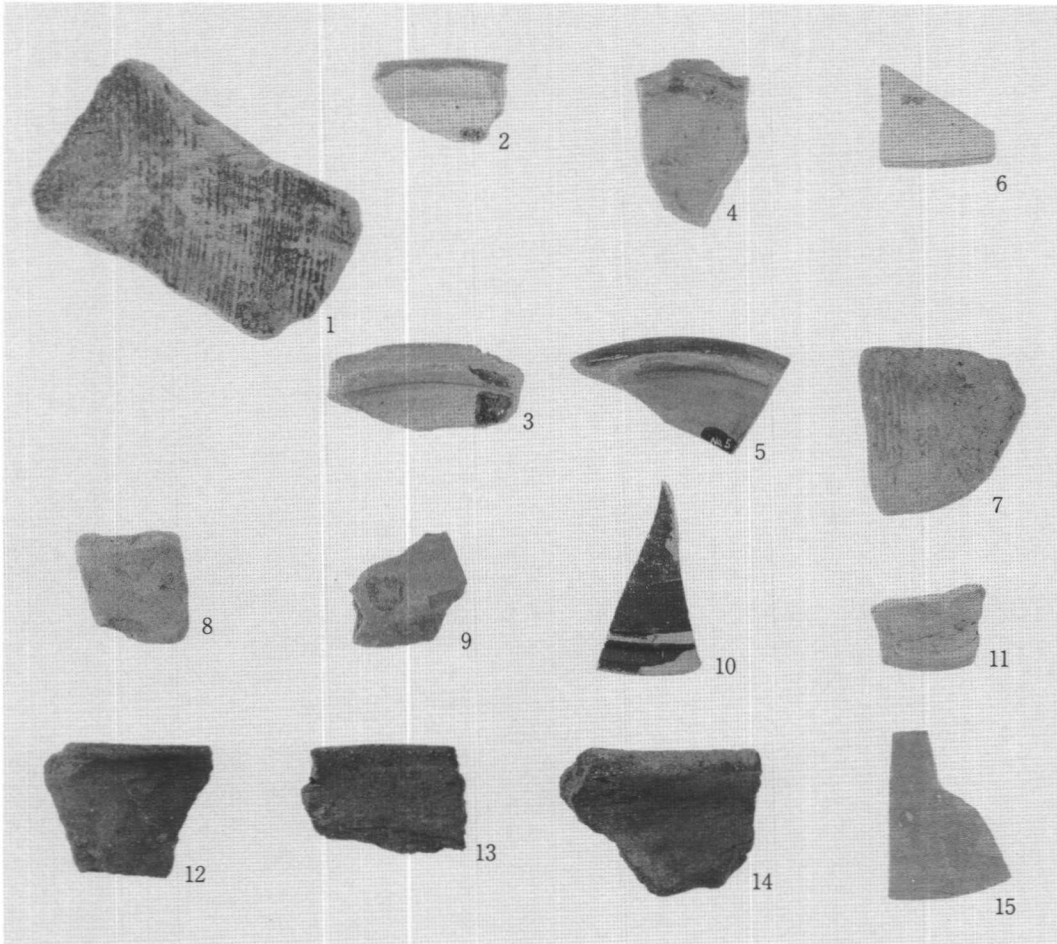
(2) ピット群完掘状況 (西から)



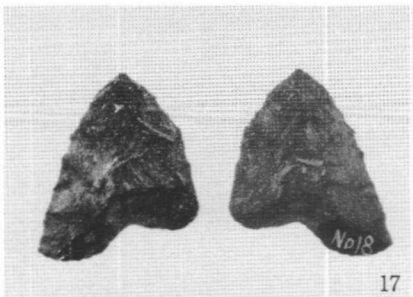
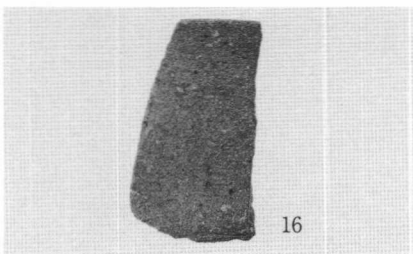
(3) 第1号土坑 (西から)



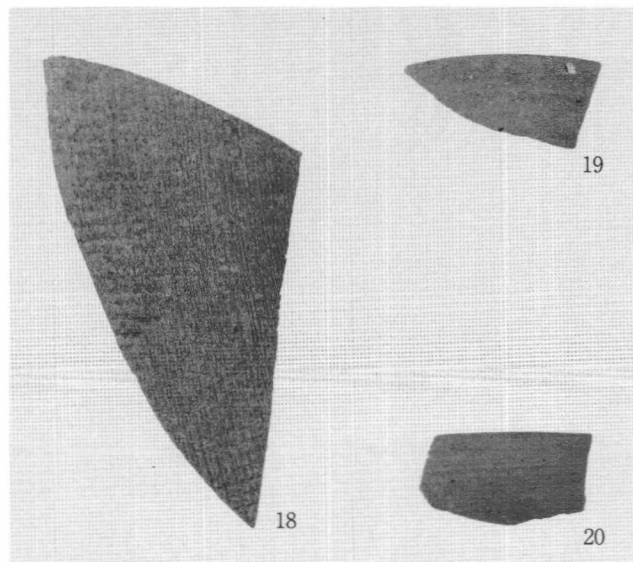
(4) 水田暗渠・溝 (x=440 ~ 445 付近・西から)



(1) 河川1・2出土遺物

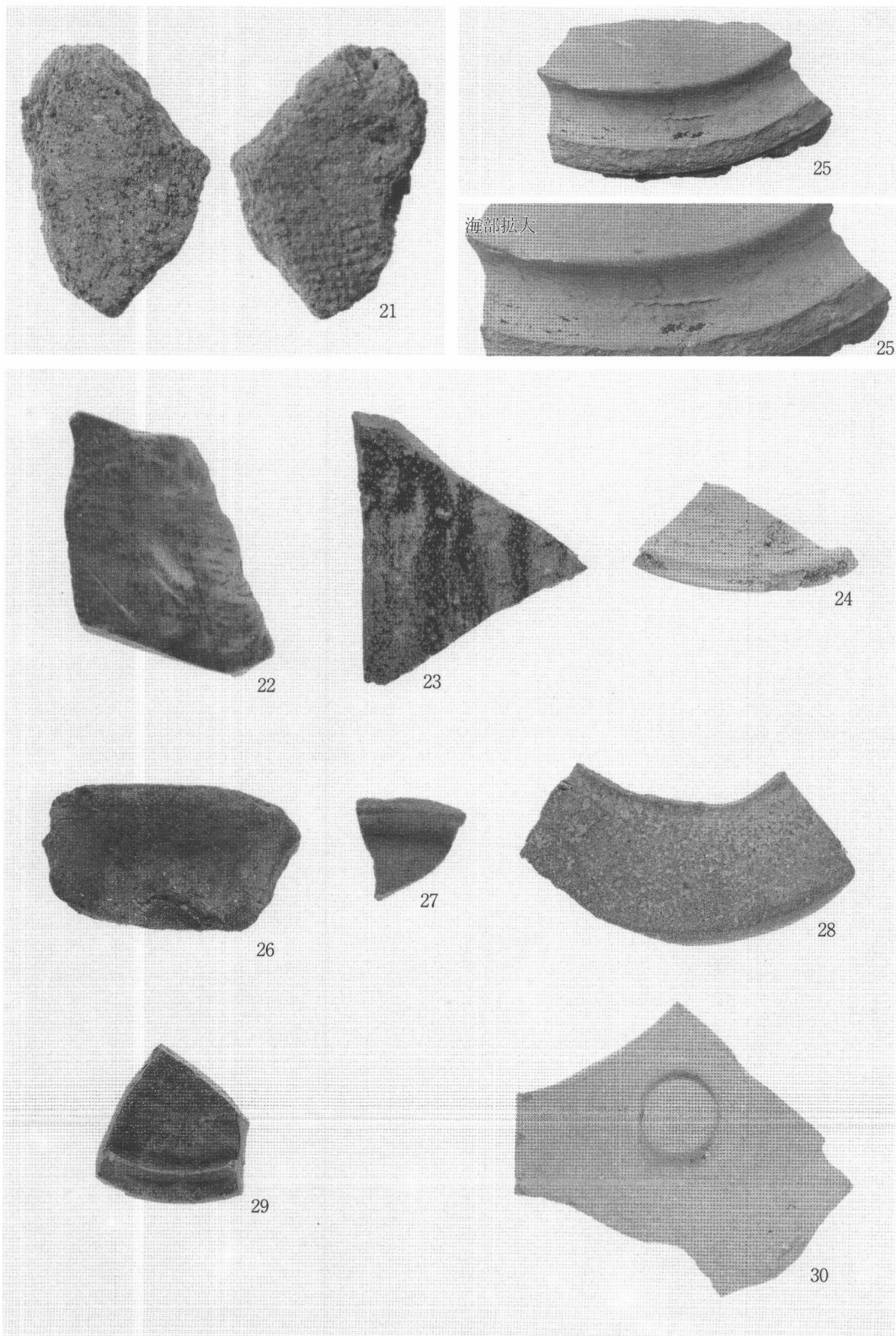


(2) 河川3出土遺物



(3) 第1号溝出土遺物

吉田構内農学部バイオ環境制御施設新営に伴う試掘調査 六



清掃時・出土遺物・採集遺物